
境界線上の筆しらべ

灯火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の筆しらべ

【Nコード】

N9361Y

【作者名】

灯火

【あらすじ】

帰ろうと思つたら突然神隠し！？そして起きたらタカマガハラ！？神になったり、神に弟子入りと現実離れの事に巻き込まれてもめげない主人公の、アンチシリアスストーリーです。

第零画 始まり(前書き)

何処だよ、此処・・・

第零画 始まり

side主人公

キーンコーンカーンコーン

金曜日。今日最後の授業が終わったことを知らせる鐘が鳴った。日直が起立、礼、と号令を掛けるのに合わせて、俺も礼をする。HRでは担任の軽く聞き流し、気付くと教室中がお帰りムードだった。

俺は右手に鞆を提げて、教室を出る。

廊下を歩いていると、あちこちから休日の予定を話し合っている声が聞こえる。

だが、俺にはそんなのどうでもいいことだ。今日は早く帰ってゲームやってゲームやってゲームをやる予定だからな。

昇降口で靴に履き替え、携帯でメールをチェックしながら校門を出た時、それは起こった。

いきなり周囲が静まり返った。何事かと思いい顔を上げると、其処には

「何処だよ、此処・・・」

目の前に広がっているのは一言で表すなら、星の海。比喻でも何でもなく、そのものだ。

「おいおい。何がどうなってるんだ」

左右を見渡し、後ろを振り向いた時、俺は言葉を失った。

視線の先にあったのは、眩しく輝く街のような何かだった。

見た目は街だが、何かが違う。こつ、気配と違っていつのか？何か
オーラみたいなのが出てるような気がするんだ。

「・・・行ってみるか」

あそこに行けば、何か分かるかもしれない。そう思い、俺は歩き出
した。見た感じではそう遠くなさそうだし、すぐに着くだろう。し
かし、

「うおっ！？」

突然体のバランスが崩れ、俺はその場に前のめりに転んでしまった。
違和感を感じ、脚を見た時、俺は再び言葉を失った。

「どうなってんだよ、おい」

脚がほどけていくのだ。綺麗な光となって、ほどけていく。さらに
違和感を感じ、手を見てみると脚と同じように指先からほどけてい
るところだった。

・・・えーっと、これってピンチ？ピンチか。って、何がなしゆ
うて自問自答してんだ俺は。

そんな間に、身体はどんどんほどけていき、ついに全身がほどけき
った。

だが、俺はまだその場所に居た。動けない。だが、周りの風景は見
える。

さっきと違うことと言えば、何だかすげえ圧力を受けてて今にも押
しつぶされそうってことぐらいだ。

(あー・・・痛い。うん、凄く痛い。これ以上は無いつてくらいに
ね。これやばいなー。俺死ぬなー。だが断る！)

死にかけてるのに、何故だかあんま焦らねえなあ俺。何でだろうね？
てかすつげえ苦しいんだけど。誰か助けてくんねえかなあ？まだ昨
日買ったばっかのエロゲやってねえんだけど。

意識が徐々に薄れていく。こりやもう限界かな。諦めかけた時、声
が聞こえた。

「こ・・・凄い・・・消えてな・・・アマ・・・君」

意識が薄れていてよく聞き取れなかったが、俺の意識は其処で途切
れた。

第零画 始まり（後書き）

皆さんどうも。初めての人は始めまして、灯火です。

シリアス作品を書くのに耐え切れなくなっこの作品を始めました。さて、今回から始まったこの小説。前書きの時点で混乱した人も居たのではないでしょうか。

でも、その混乱も物語を読むことで薄れたと思います。

こんな駄文ですが、これからもよろしく願います。

感想やアドバイス、誤字脱字等がありましたら教えてください。

自分、もう一つ小説を書いているのでそちらの方もよろしく願います。

それでは、引き続き第一話をお楽しみください。

第一画 馱神誕生（前書き）

アマテラスが配下、“荒神”月読命が此処に貴殿への永遠の忠誠を誓う。我はこれより貴殿の手となり、足となりましょう、アマテラス公

第一画 駄神誕生

side主人公

俺の意識は突然戻った。

起き上がってみると、其処は敵かな雰囲気を醸し出す武家屋敷の様な建物の中だった。

つて、あれ？

“起き上がった”、だと？

確か、脚はさつき無くなってしまった筈だ。脚だけではなく身体全てが。

それに何かおかしい。俺は今立っているが、二本足で、ではない。四本の脚で地面を踏んでいる。

状況を理解出来ない俺は、近くにあった水瓶の水面に映った自分の姿を見て、固まってしまった。

「何だ、これ。何で俺、犬みたいななってんの？」

水面に映っていたのは人間の姿ではなく、犬・・・とういうより狗の方がしっくりくる姿。てかこんな狗が居んのか普通？

簡単に説明するとあれだ。某有名神喰らい2に出てくる新アガミのマドワークが黒くなつて带状器官が紫になった感じだ。

「そついや声も出せんのかよ、こんな身体なのに。視線もやけに高いなー。大体全長4mぐらいかな？つうか、此処何処？」

「やっと目が覚めたのかい？ユーは随分と御寝坊さんだね」

後ろから声が聞こえ、そちらに振り向くと二つの影があった。話し

かけてきた方は和服に紫の袴を履き、頭に謎のお面を着けた金髪の若い男。もう一方は白に赤い隈取の入った狼だ。それを見た俺は開口一番金髪を指差しながら、

「へ、へーんーたーいだー」

と言った。それに対して金髪は、

「んな！？何て失礼なんだユーは！ミーは変態などではない！」

「妙ちくりんな仮面つけて妙な英語を話す金髪ロングの何処が変態じゃないって言うんだ！」

「ぐつ。確かにミーはアマテラス君の毛を懐に持っていたり、アマテラス君の匂いが付いた物を大事に取って置いたりしてるが決して変態などでは「おい」何だい！？」

「後ろ後ろ」

「え？」

俺が指(?)差した方向に居たのは金髪から3m程距離をとったアマテラスというらしい狼だった。その顔はかなり引きつっている。

「ち、違っんだアマテラス君！これはそういうのじゃなくてだね！
って、何でさらに距離をとるんだい！？」

そんなやり取りが数分続き、やっとのことでアマテラスが戻ってきて、
金髪が説明を始めた。

「まず自己紹介をしておくよ。ミーの名前は“ウシワカ”。それで此方が慈母神こと“アマテラス”君」

金髪がウシワカで狼がアマテラス。ふむふむ……って何か聞いたことのある名前だなあ。うーん……。

「思い出した！」

「な、何をだい？」

突然大声で叫んだ俺に対して、ウシワカが此方の顔を見上げながら若干引き気味に問うてくる。

「あんたらあれだ！グラフィック最高！内容最高！アクション性やその他諸々のことがとにかく最高の神ゲー『大神』に出てくるキャラだ！てことは此処は夢の中か？だったら覚める前に堪能しておかねえとな！」

「ちょ、ちよつと待ちたまえ！」

部屋を出て行こうとする俺を、ウシワカが引き止める。

「何だよ変態？」

「だから変態じゃないと！……あーもうそんなことはこの際どうでもいいか。君が何を言ってるのか知らないけど此処は夢なんかじゃなくて“現実”だ！」

その言葉に俺は動きを止め、元の位置に戻る。

「マジで？」

「マジで」

えー現実なのかよー。じゃあ何？俺の元の身体はもう消えちゃったの？

「それより説明を続けるよ。まず此処について説明するけど、此処の名前は“タカマガハラ”「やっぱ此処ってゲームン」それはもういいから話を聞いてくれ。ユーが此処に来た理由、それは」

「それは？」

「ユーは“神隠し”にあつたのさ。こつちの世界で起きた光と影のバランスの崩壊によって生じた、ね」

「バランスの崩壊って？」

「この世界には光と影がある。それらはお互いがお互いを相殺し合うことでバランスを保っていたんだ。だが、影側である“常闇ノ皇”トコヤミノミカドの消滅によってそのバランスが崩れ、空間が不安定になってしまった。ユーはその歪みに巻き込まれて此方側に来てしまい、危うく消えるところだったのさ」

「やっぱ俺、あのままだと死んでたのかー」

いやーそりゃ肝の冷える話だなあ、おい。良かったぜ消えなくて。

「でも、普通だったらタカマガハラに迷い込んでしまった人の子の魂は、その圧力に耐えられず一瞬で消滅してしまうんだ。他の魂は

皆そうだった。だが、ユーは違った。ユーの魂は圧力にすぐには押し潰されずに、残っていた。だからミー達も助けに行くことが出来たんだよ？」

「あれ？助けてくれたのって御宅らなの？」

「そうさ。正確に言うとユーを助けたのはアマテラス君さ。ユーの魂はどうやら特別みたいだね。普通の魂よりも圧倒的に丈夫なんだ。神力との適合率も高かったら、アマテラス君が神力の一部を移すことでユーを神にして此処の圧力に耐えられるようにした。理解できたかい？」

えーっと、つまりだ、話を整理すると俺は常闇ノ皇の消滅によって生じた歪みの所為で神隠しにあつて、タカマガハラに迷い込んだ。普通の魂はその時点で消滅する筈が俺のは特別で中々消滅しなかったらアマテラスが力の一部を移して俺を神にすることで俺は生きながらえた、ってことか？

「そうかー。俺神様になったのかー。そりゃすげえや」

「随分と薄い反応だね」

「そうか？これが現実なら一々否定してないで認めちまった方が楽だろ」

それを聞いたウシワカは、フツ、と笑って言った。

「本当に奇妙な奴だよ、ユーは。それじゃあ、最後の仕上げと行くか」

仕上げ？はて、それは何のことだろう。

「さっき影側の力が消滅したって言っただろう？故にユーはアマテラス君の対極存在として“悪”の力を持つ神になってもらったんだ」

「“悪”の力って、具体的にはどんなの？」

「純粋な“破壊”の力。と言ったら分かりやすいかな？」

「ふむふむ。で？それと仕上げと何の関係が？」

「ユーの力が予想以上に大きくてねえ。このままじゃバランスが逆に傾いちゃうんだよ。だから君の力を、別の“器”に入れて抑制するのさ」

「大きすぎる？逆に傾く？別の器で抑制？・・・駄目だ、全然分からん。」

「えーっと・・・だ。つまり俺は相当なイレギュラーで、このままだと此処もヤバイから急いで応急処置を取ろうってか。そんなんで間違っていないよな？」

「それじゃあアマテラス君。始めてくれ」

「ワフッ」

アマテラスが此方に近づいて来て、俺の数歩前で止まる。そして、その身体を光が包んだ。

光はやがて、俺の身体をも包み、輝く。

何か・・・あつたかいな。

光は、眩しくも熱くも無く、暖かい。俺はただただ、目を瞑ってじ

っとしていた。

どれくらい経っただろうか。変化は突然訪れた。

身体を包んでいた光が一層強く輝き、身体を引き絞っていく感覚。巨体は縮んでいき、四肢は人のそれに近づいていく。そして光が空中に霧散する。今度はちゃんと二本足で立っていた。俺の身体は既にさっきまでのマル ウークではなく、人になっている。

最初と同じく水瓶の水面を覗く。其処に映っている顔は何と言うか、

「・・・何か、キリツとしてるな」

てか、自分で言うのも何だけど結構イケメンだな。黒髪は犬の耳の様なアホ毛があり、顔は鋭い黒目が印象強い。

「器”って言ってもただの人の身体じゃんか。もっところ凄いのが来ると俺は思ってたんだけどな」

「ただの人じゃないよ。それじゃあユーの力はしまいきれないからな。その身体は“オйна族”の身体さ。彼等の肉体は強靱で神力にも適合しやすいからね」

“オйна族”？ってことは犬になれたりすんのか？

俺は試しに、その場で前方宙返りをしてみる。何だか身体が軽くて簡単に出来た。

俺の姿は着地する直前に変化した。三度水面を覗き込む。今度の姿は簡潔に説明すれば、ものけ姫に出てくる小さい方の山犬。黒い毛にアマテラスと同じような紫の隈取が入っている。

獣化が出来ることを確認した俺は、もう一度前宙をして人に戻る。

「さあ、これでユーもアマテラス君の配下である“筆神”の一人、“荒神”だ」

「え？俺が“筆神”？てか、何で“荒神”？」

「この世の悪を喰らい、破壊しつくす世界の“必要悪”、という意味さ」

ほほう。確かにアマテラスの力で神になったんだから“筆神”になってもおかしくないか。

「そう言えば、ユーの本当の名前は？」

「俺の名前か？俺の名前は“つきもと あきよみ月本秋読命”だけだ」

「変わった名前だねえ。そうだなあ・・・何か良いアイデアはないかい、アマテラス君？」

「ワフツ！」

「それは良いね。よし。秋読命、ユーの名前はこれから“つきよみ月読命”だ。アマテラス君命名だよ」

月読命・・・か。確か、神話上じゃあ天照大神の対になる神だったか？まあピッタリじゃねえの。

「配下、ね。それじゃあこうしといた方がいいかな？」

俺はアマテラスの前に進み出て、其処でひざまずき口を開く。

「アマテラスが配下、“荒神”月読命が此処に貴殿への永遠の忠誠を誓う。我はこれより貴殿の手となり、足となりましょう、アマテ

ラス公」

いやー、言ってみたかったんだよねえ、こういうカツコイイ台詞。アマテラス公は俺の言葉に少し驚いたようで、気恥ずかしそうにワッ、と一回鳴いた。と、其処に新たな声加わった。

「見知らぬ気配がすると思えば、そ奴は何者ですか？アマテラス様」
声のした方を振り向くと、入り口の扉の前に一つの人影があった。
人影が此方に近づいて来る。その姿は、白い和服と袴に身を包んだ小さい少女だった。

「ああ、“断神”じゃないか。いや、実はね、ユーも知ってのとお
り魂が迷い込んだらう？その魂を“筆神”にしたんだ。それが其
処に居る彼さ」

「ワフウ」

「ふむ……。神力に混じって妙な気配を感じたが、主がその原因
か」

「ええ、まあ、はい。多分そうです。あ、自分月読命って言います。
よろしくお願ひします、断神様。……。それにしても、なあウシ
ワカ「何故にミーは呼び捨て!？」細かい事は気にすんなよ。それ
よりさ、本当にこの幼女が断神様なのか？」

言った瞬間、
スッ

断神が背中に収めていた剣を、目にも止まらぬ速さで抜き放ち、俺

の首へと突きつけていた。

どうすりゃこんな小さな小さな身体で、こんな刀身が軽く2mはある剣をこんなに速く振れんだよ……。

「次言ったら、殺すぞ？」

「すみませんしたあああ！！」

明らかに殺意のこもった声で言われ、俺は急いで土下座をする。恐らくその速さは有史以来最速だっただろう。いや、よくは分からないけどね。

「ふんっ」

断神様は剣を鞘に戻すと、殺意を放ったままその場で腕を組む。重苦しい空気が漂う中、アマテラス公が口を開く。

「ワン、ワフ」

「？何でしょう、アマテラス様」

「ワフウ。ワンワン、ワフ」

「私がコイツを指導しろと？何故私がこの様な無礼者を？」

「アオーン」

「は？この者の力が純粹な“破壊”ですと？それで同じように純粹な“破壊”を持った私が指導しろと。分かりました。我等が慈母神のご命令、しかと承ります。それで、この者は殺しても良いのです

か？」

「ワフ！？ワン、ワンワンワフウ！」

「駄目ですか。なら殺さない様に努力します。おい、行くぞ月読命」

「・・・何で断神様もウシワカもアマテラス公の言葉が分かるんだ？俺には一つも分かんねえ。やっぱ慣れって奴かな？」

「何時まで其処でつつ立てるつもりだ？さっさと行くぞ」

「え、ちょ、待って、待ってくださいよ断神様！あ、あー！ー！！」

「がんばれ。応援してるよー」

「アオーン」

「い、痛いっ。髪の毛掴まないでくださいよ！この耳っぽいアホ毛、個人的に気に入ってるんですから！」

「そうして欲しかったらまず服を着ろ。この露出狂」

え？つてあれ？俺生まれのままの姿なんだけど？服は何処に？俺、このまんまじゃ単なる変態じゃん！

「断神様。服は何処に」知らん。自分で探せ「じゃ、じゃあ。その服は何処で」何だ？主には女装癖があるのか「もういいです・・・」

そんなこんなで、月読命の物語は始まった。

第一画 駄神誕生（後書き）

どうでしたか？

ちよっと頑張りすぎて文字数がだいぶ増えちゃいましたけどねw
そんなこんなで月読命の物語が始まった訳ですね。

どうでしょうね、この主人公。人に好かれやすいキャラにしようと
おもったんですけど。

まあ、これからも彼のことを生暖かく見守ってやってください。
それじゃ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9361y/>

境界線上の筆しらべ

2011年11月28日07時03分発行